

2020年4月5日 大井バプテスト教会主日礼拝説教

説教題「わたしが生きているので」ヨハネによる福音書14章15～19節

主任牧師 加藤 誠

「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにして下さる。」(ヨハネ14・16)

「わたしはあなたがたをみなしごにはしておかない。…世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きようになる」(ヨハネ14・18～19)。

イエス・キリストは、暗闇の中を歩む私たちを照らし出す光として来て下さいました。

今、私たちの世界は、かつて経験したことのない暗闇におおわれつつあります。一緒に食卓を囲み、語り合い、寄り添い合う。人が人として生きるうえで一番大切な営みが許されない。愛する家族を看病することも、その最期の時に手を握ることも許されない。命を救うために懸命に働く医師や看護師さんたちが、患者さんに近づくことで自らウィルスにおかされる危険を負わされる。他者に近づくことを恐れなければならない。ここまで人と人との交わりを広く破壊するウィルスがかつてあったのでしょうか。私たちの存在のあり方を大きく揺さぶるこの危機と、どのように向かい合っていくことができるのか。世を照らす命の言として来て下さった、イエス・キリストにしっかり心に向けて集中させていきたいのです。

今、ご一緒に読んだ聖書の箇所は、十字架を前に散り散りバラバラにされていく弟子たちのために、主イエスが語りかけられた約束の言葉です。

中でも、私の心に強く響いてくるのは、「わたしも生きているので、あなたがたも生きようになる」(19節)という、主イエスの言葉です。

十字架においても、主イエスは生きている。

人間の悪が神さまの愛に勝利したように見える、あの十字架においても、主イエスは生きておられる。

その主イエスゆえに「あなたたちは生きようになる！」という、力強い約束がここに記されています。

いったい、どのように「私たちは生きようになる」のでしょうか。

二つのことが、その言葉の前に語られています。

一つは、主イエスの十字架を通して、父なる神は「別の弁護者」である「聖霊」を送って下さる。大丈夫、心を騒がせるな…ということです。「弁護者」とは、いつも私たちの側にいて、私たちと共にいて、助けて下さる方のこと。弟子たちがたとえ散り散りバラバラにされたとしても、その弟子たちと共にいて、助けて下さる聖霊によって、私たちは主イエスのもとに共におらせていただける。私たちは決して「みなしご」にはされない。神さまの愛から引き離されることはないのです。

もう一つは、「聖霊」は「真理の霊」であるということ。「真理の霊」とは、人間の偽りを裁いて、最後に勝利する神さまの愛を示す働きです。私たち人間の目に映る十字架は、敗北であり、絶望であり、死以外の何ものでもない。しかし、その十字架に込められた神の深い慈しみを、「真理の霊」である聖霊は、私たちにも見えるようにしてくれる。ですから、どんなに人間の悪が、神さまの愛を打ち砕いて勝利したかのように見えても、私たちは失望に終わることはないのです。

大井バプテスト教会は、先週の時点で、今日4月5日と12日は、みんなで共に集まる形での礼拝を休止することを決めました。イースターという、一人でも多くの方たちと一緒に、イエス・キリストの復活の希望にあずかる喜びのときに、共なる礼拝をもてないことは、ほんとうに大きな痛みです。そして、今の東京の感染拡大状況を見ると、次に共なる礼拝を守れるのはいつになるのか、まったく予断を許さない厳しい現実が私たちの目の前に示されています。

けれども、たとえ、私たちが一つの場所に集まることができず、それぞれ散り散りバラバラにされたとしても、「弁護者」である聖霊が一人ひとりと共に歩んでくださり、私たちすべての者を、真の羊飼いであるイエス・キリストのもとに共におらせてくださるのです。そして「真理の霊」である聖霊が、ほんとうに心を向けるべき真実を、私たちに示し続けてくれるのです。

大井バプテスト教会がその八九年の歴史の中で、これまで一度だけ礼拝を休止したことがありました。それは戦時中、東京での空襲が激しくなった時代のこと。信徒たちは疎開先に散っていきました。しかし、それぞれの疎開先で信徒たちは家庭礼拝を守り、再び共に礼拝することが許される時を望み見て、信仰のともしびを灯し続けたのでした。

困難の中でこそ、実は見えない神さまへの信仰が深められていきます。

なぜなら、暗闇が深まる場所でこそ、神さまの真実の愛は、光り輝くからです。「真理の霊」である聖霊の働きによって、イエス・キリストが十字架につけられてまで私たちに手渡してくださった神さまの真実の愛が見えてくるからです。

そして、困難の中にこそ生きて働かれる神さまの愛に、一人ひとりが根差していくとき、私たちはむすび合わされ、そこにキリストの教会が建てられていきます。

今回、私たちは共に集う形での礼拝を断念することを選択しました。しかし、それぞれの家庭が礼拝の場となり、教会の友を想い巡らし、教会のこれからを考えながら、聖書のみ言葉に深く聴く場とされることを祈ります。

「わたしが生きているので、あなたがたも生きるようになる」。

それぞれがいま置かれている場所が、主イエスと共に歩ませていただく喜びの場所に変えられていきますように。不安や恐れに支配されるのではなく、「弁護者」であり「真理の霊」である聖霊の助けと導きによって、神さまの愛と信仰と希望につながられて歩む場とされますように。祈ります。